第 58 回「帰国子女教育を考える会」研究例会 報告

（2010 年３月６日（土）14：00～17：00　於　大阪 YMCA 土佐堀会館）

例会進行役：浅野　享三　氏（南山短期大学）
第Ⅰ部　＜発題＞（発題者）
１．三谷　幸生　氏（トヨタ自動車株式会社人事部海外子女教育相談室カウンセラー）
２．安藤　比呂美　氏（南山国際高等学校・中学校教頭）
３．岡地　美由紀　氏（海外生活体験のある女性の会「ＡＬＯＥ」）
　　恩田　美幸　氏（海外生活体験のある女性の会「ＡＬＯＥ」）
第Ⅱ部　＜発題者の方々と参会者による自由討議＞

今回の研究例会は、上記の（発題者の）方々をお迎えし、特に中部地区の帰国児童・生徒を取り巻く事情と受け入れ校の様子について、ご発題いただくことになりました。

例会案内にも記されていましたように、帰国子女教育が世界情勢、とりわけ経済情勢に敏感に反応せざるを得ない中、製造業が盛んな中部地区は、特にアメリカや中国経済の動向に影響を受けながら、多くの帰国児童・生徒を受け入れてきました。この地区への帰国児童・生徒の数は、統計的には全国の約 1 割ですが、他地区への影響力や先進的な取り組みは軽視できない面があるということで、今回の研究例会が企画されました。

以下に、当日の録音テープや資料、記録者のメモ書きをもとに研究例会概要を記しますが、よく聞き取れなかった部分等もありましたので、あくまで記録者（土肥）の不十分な要約であることをお断りしておきます。

まず、第１部最初の発題者である三谷幸生氏は、長年名古屋の公立学校の教員をされ、ミャンマーへの派遣教員も経験し、現在は、トヨタの海外子女教育相談室カウンセラーをされている。そのカウンセラーの立場から、海外に赴任される保護者には、子どもにとって海外生活は短期間の「冒険旅行」に出かけることであり、３、４年後には帰国するものとして子どもたちの帰国後のことも考えておくべきで、「準備万端」でなくてもその 10 分の１の「準備千端」程度はしておくべきと言っていると述べられた。また、「帰国生は日本の教育を変える宝」とも述べられた。三谷氏は、学校教育の現場で子どもから学んだこととして、「帰国生はバイタリティのある子が多く、子ども同士が切磋琢磨する」ことを挙げられた。そして、海外体験で乗り越えたこと、苦労したことが帰国生の自信になっていることを語られた。

三谷氏は、現在は一企業の教育相談員だが、親の要望をすべて聞くわけではなく少し距離を置いて見ているし、子どもとも間をおいている。というのは、子どもが親の期待を背負っている場合があって無理をしていたり、子ども自身の気持ちがつかめない場合があるからである。トヨタ自動車関係で約 1,300 名の子どもたちが海外にいるが、名前ぐらいは知っていても、すべての顔まで把握しきれない。また、トヨタグループの相談もやっていると述べられた。

次に、三谷氏は、「帰国子女受験はチャンス？」について語られた。親の意識が変わってきていて、教育相談でも、「どこの高校に入れるか？」という受験の問題に関心が強く、海外でどのような文化を学んだかについてはほとんど関心がないと述べられた。帰国子女枠の推薦入試は、一般入試の前にあり、親は少しでも早く楽になりたいようで、「帰国子女枠の受験資格の条件」についての相談が結構ある。「チャンス」というのは「機会」だが、「好機」という意味もあれば、「偶然」という意味もある。帰国子女「枠」は、必ず合格するという保証があるわけではなく、宝くじを買うようなものと考えるべきである。オリンピックは「参加することに意義がある」というが、与えられた中で「ベストを尽くす」べきであるとも述べられた。

さらに、三谷氏は、用意された資料をもとに愛知県の受入校の様子について述べられた。愛知県は公立が強く、公立高校は尾張地区と三河地区の二つの大学区に分かれていること、帰国生の公立高校の推薦入試は６校が実施していることなどに触れられた。帰国子女「枠」について、以前はその「枠」に入っているとほとんど合格していたが、最近は不合格者が出ていることに触れられた。将来は、帰国子女（生徒）で区別するのではなく、現地の体験、生活してきたことを一つの個性として評価するようにすべきとも述べられた。

２番目の安藤比呂美氏は、南山国際高等学校・中学校教頭という立場から発題された。

まず、南山学園についての説明をされた。南山学園は、南山大学、南山短期大学、南山高等学校・中学校（男子部と女子部）、南山国際高等学校・中学校、聖霊高等学校・中学校、南山大学附属小学校を擁する総合学園である。歴史的には、1979 年に帰国子女特別学級が設置され、1981 年に国際部が（於　名古屋市いりなか）21 名でスタートし、1991 年に豊田市に移転。南山国際高等学校・中学校は、日本で唯一の帰国生と外国人生徒からなる学校で一般生は認めていない。現在の生徒数は、780 名（帰国生約 700 名、外国人生徒約 80 名）。また、随時編入を認めていて、月 2 回ぐらい編入試験があり、途中編入受験生は年間約 130 名いる。

以前との違いは、インターネットの普及で情報が豊富になり、毎日のようにメールが入ること、学校説明を海外へ出かけてするようになったことを挙げられた。また、塾の情報には間違った情報もあるという指摘もされた。

そして、帰国生が感じる困難として、帰国して先生に差別を受けたこと、生活、習慣、マナーの違いを感じることなどを挙げられたが､友だちづくりで乗り越えることを指摘された。また、日本の学校が変と感じたり、日本人が変と感じたりすることも述べられた。

また、帰国生が海外で身に付けた付加価値、特に言語（英語）や資格（英検）などは、上智大学の推薦枠やカトリック枠などでも有効な場合があることや、言語（英語）の興味の持ち方の違い（思考力、表現力、問題解決能力など）にも触れられた。さらには、帰国生は、大学に入ってからの「ノビシロ」が大きいことも指摘され、海外で苦労して身につけてきたこと、乗り越えてきたこと等が影響していると述べられた。

3 番目には、ボランティアグループ「ＡＬＯＥ」（「海外生活体験のある女性の会」）の岡地美由紀氏と恩田美幸氏から発題がなされた。「ＡＬＯＥ」は、1985 年に発足、名古屋で活動を開始し、今年で 25 周年を迎える。多い時は 200 名を超えたが、現在は 42 名。滞在経験国は 11 か国。

主な活動は次の４点である。一つ目は、名古屋大学留学生のためのバザーや日本語教室を開催していること。二つ目は、「あかさたな」という日本語教室を運営していること。サロン形式で外国人の人たちと日本語で会話をすることが目的である。三つ目は、ジャーナル（機関誌）の発行（年２回）をしていることである。会員の海外生活体験記や旅行記等を掲載している。四つ目は、海外赴任者のサポートで、相談（メール相談）や講演活動をしていることである。

会の活動として、特に、海外で学んだことを中心に会員交流をしていること、海外赴任前後のサポートとして、赴任先の教育事情等の情報提供をして、不安を取り除いたり、精神的なサポートをしていること、「おしゃべりネットワーク」として機能していることなどを述べられた。

また、会としては、帰国子女を受け入れてくれる学校が少ないので、会員の子どもが通っている学校の情報を伝えたり、会員自身の経験を生かし、情報を提供して、精神的な不安を軽減することに努めていると述べられた。行政との情報交換や連携、サポート体制があればとも付け加えられた。

第Ⅱ部の＜発題者の方々と参会者との自由討議＞では､かなり活発な質疑応答がなされたが、主なやり取り（すべてを記載出来ないのは残念ではあるが）は、次の二つである。一つは、愛知県の公立校や南山国際高・中での「編入試験」に関する実務的な問題についてであり、もう一つは、「帰国子女に親は何を求めているのか」や「海外日本人学校の役割は何なのか」という理念的、本質的な問題についてであった。「海外子女の実態は多様化している」という指摘があり、その実例として、アメリカの補習授業校児童・生徒の動向や教育相談内容の多様化等が挙げられた。

最後に、以下のように、今回の発題者から一言ずつ発言があり、盛会の内に終了した。

三谷氏「南山国際高・中は特殊かなと感じた」
安藤氏「南山国際高・中ではたくさん受け入れられないので、公立校に頑張ってほしい」
岡地氏「情報交換が出来て良かった」
恩田氏「中部でもこういう会が出来れば…」
（文責：土肥）